日本篆刻家協会会報

第24号　令和2年4月15日発行
発行：日本篆刻家協会
563-0032 池田市石橋2-2-10-203
TEL 072-760-3852 FAX 072-760-3853
E-mail : info@n-tenkoku.jp
http://www.n-tenkoku.jp

令和二年度 総会開催

令和二年度総会が一月十二日にオークラアクトシティホテル浜松で開催され、全国各地から役員、会員計一五九人が参加した。

今年度の運営について基本的事項を協議する理事会

総会に先立ち、前日十一日に企画委員会、十二日十三時から理事会が開催された。

総会は十四時三十分から、井谷五雲理事長が議長を務め滞りなく議事が進められた。令和元年度事業報告、同決算報告、同会計監査報告、令和二年度事業計画案、同予算案、同役員案が提案され、いずれも原案どおり承認決定された。

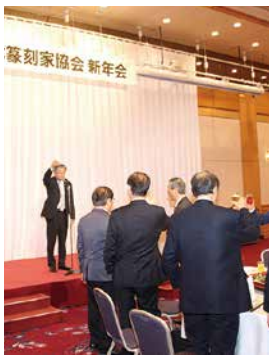
総会後十六時から「黒田玉洲先生第三十六回読売書法展準大賞ご受賞を祝う会」が伊藤雅夫代表理事の司会で進められた。尾崎蒼石会長、井谷五雲理事長のお祝いのことば、新年あいさつに続いて、喜多芳邑副理事長からお祝いの記念品が贈られ、黒田玉洲代表理事が謝辞を述べた。古溝幽畦常務理事の音頭で乾杯し祝宴となり、引き続き、黄平齋代表理事の進行で第二部「新年懇親会」となった。恒例の企画委員提供の福引で盛り上がり和気藹々と交流を深めた。

最後に、真鍋井蛙副理事長、石原豊玉常務理事から来年度総会は高松市で開催と案内があり、十七時三十分幕を閉じた。

全国各地から会員が参集した総会

井谷理事長を議長としてすすめられる総会

恒例の福引の一コマ



古溝常務理事の音頭で乾杯

謝辞を述べる黒田玉洲代表理事

喜多芳邑副理事長からお祝いの記念品贈呈

二〇二〇年度のスタートに際して

理事長　井谷五雲

二〇二〇年の日本篆刻家協会は一月十二日に静岡県浜松市で開催された新年総会から既に動き出しております。

大阪・神戸以外で新年総会を開催するのは、昨年の石川県山代温泉での開催に引き続いて二度目のことです。昨年は厳冬の北陸路での開催に、参加人数が少ないのではないかと危惧される声も多かったのですが、それも杞憂に終わり、一七〇人に噛々とする多くの会員が参加され、盛況のうちに無事終了しました。このことは会報二十二号で述べた通りです。本年の浜松市での開催も、昨年と同様の参加人数を得て無事終了しました。開催にあたっては地元静岡県の遠邇篆会・墨楽印社の皆様の準備から当日の運営、後始末までのご努力に対しまして厚くお礼を申し上げます。併せて印社代表各位の参加呼びかけに対しまして謝意を表します。来年は海を渡って四国香川県の高松市での開催が決定しております。四国香川の讃明篆会・常心篆会の皆様には準備など宜しくお願い致します。

本協会は昨年、創立三十五周年を迎えました。本年は新たなるスタートを切らんと意気込んでおります。会員数の減少を最小に抑え、新たなる会員を一人でも多く迎え、会員諸氏には篆刻の魅力を存分に味わっていただき、その技量を更に高めていただきたいと。そのために協会の存在意義である三本の柱、すなわち①研究・研修の充実、②作品発表のための展覧会の実施及びその機会の充実、③国内外の同好の士との交流の実施については関西圏中心の先生方の運営にはなりますが、各印社代表者と連携を密にして、執行部一同努力しております。私もその一員ではありますが、その活動の奮闘ぶりを見ておりまして、感動に値すると常々思っているところです。

本年の第三十六回日本篆刻展は五月二十日から例年のとおり兵庫県立美術館王子分館原田の森ギャラリーで開催するべく、過日審査会が行われました。会員・公募合わせて七〇〇点を越え、小中学生と高校生の作品を加えますと、一三〇〇点を越える出品数になりました。大変多くの参加者を得て開催できることを本当に嬉しく思います。しかし、残念なことにこの度の全世界規模の新型コロナウイルス感染症の流行によって、私たちの活動も大きく制限されることになってしまいました。既に受賞式と祝賀懇親会の中止を決定しました。本年の特別展観は西泠印社理事で、独特な肖像印で有名な、張耕源先生の書画刻印その他を一堂に展観する予定です。しかし、張先生をはじめとする訪日団二十四名の方々の来日も中↖

令和二年度 役員

【常任顧問】
山下方亭

【会　長】
尾崎蒼石

【理事長】
井谷五雲

【副理事長】
喜多芳邑　酒居石荘　小朴圃　多田龍淵
中島春緑　平田蘭石　真鍋井蛙

【代表理事】
伊藤雅夫　黒田玉洲　黄平齋　渡邉和琴

【名誉理事】
梶田稲州　小林畦水　武井岳峰　田中緑翠
保田昌石

【常務理事】
池田泥異　井後雅堂　伊佐治祥雲　石原豊玉
出田塘葭　大村雪陵　奥田晨生　梶川久美子
北室南苑　草田翠苑　熊本夕生　田中修文
堤白遊　戸出九廬　中村葉舟　南岳杲霊
長谷川帰海　長谷川拓石　古溝幽畦　松本雅至
御手洗眉山

【参　事】
足立瑠泉　大橋安泰

【理　事】
畔原小華　阿部祥廬　稲垣華扇　射場少藍
宇於崎碧峯　遠藤米子人　大田桂翠　小上玉菡
加納孝志　岸村爽風　北田成磊　木村容庸
後藤黄太郎　嵯峨洛山　坂本舜華　下井瑤琴
関踏青　竹内立女　多田稔里　田原呉山
中林千影　名倉克彦　滑田寒鴉　畑間青露
早川聴芬　坂東香璋　東尾高岳　古野燕安
本郷紫香　馬景泉　松本艸風　山根容園
山本寿法　横井青蓮　横山龍児　吉江翠光
吉田雅風　米田黄苑

【参　与】
浅野祥雲　芦野優美子　石亀明峯　石川思玄
石原雲木　磯村育治　伊藤淨盦　稲葉竹葉
上田静雲　植野無人　内田紅楓　大槻彦裔
川久保明　北野河聲　倉野看雨　剱田白峰
小谷知洲　坂上香艸　阪口香雪　正和杏葉
杉本素月　鈴木恵草　高野弘深
多田学友　立川美津夫　田中九成　田中瑞峰
玉村芙蕖　丹下青風　永井溪舟
中島大夢　永野草翠　西田茜秋　服部九姚
花村秀嶽　林旦山　藤川冨美恵　藤縄尚子
藤本忠義　堀口耕碩　本江恵翠　増田繁治
松阪聖岳　松田泰軒　仲井祥風　永井溪舟
松本弘碩　丸山沙舟　松竹芳翠　松永六朗
村松瓊玉　山口敦子　水巻游光　宮野宗雄
山本龍石　葭岡慶石　山崎井泉　山崎一雄
吉田宗里　若杉彩雲

【評議員】
青木嘉代子　青木雄山　秋山捷華　浅野江涯
浅野春泉　浅野道男　浅野和泉　浅良朱華
新井散葉　池田蘆翠　石川無外　石留之然
伊藤梅香　今村董圃　上松荘夢　内田真弓
宇都宮蘭雪　梅原玉翠　大倉章義　大原誠
岡田桂舟　岡端如綸　小川匪石　尾川雅舟
尾原葉香　樫野麗琴　片畑仁美　加藤正順
川崎白水　川田紅渓　北畑謙之　橘高香流
鬼頭紅節　木本研塵　工藤芳悦　小森香苑
近藤胡蝶　三枝龍泉　坂田春徑　静一華
渋谷春好　鷹取千豊　巽聖石　立石見聲
田中皋仙　谷桜洲　千蔵天空　千葉晨翠
津田秀鳳　妻鳥明子　寺田和仁　寺田濤雲
寺本翠葉　土井青雅　得永春水　戸出紅桃
長尾千雲　中野聡　西岡青淡　西口青咲
庭田露舟　野中紫光　乃村翠琴　橋本游月
畠穆風　花房浩佳　原田恵苑　坂正歩
平田征男　廣田佳苑　福谷華紅　藤村香代子
藤本蘇西　古瀬章石　細川恵苑　前口紅泉
牧野象山　松川白遊　松田静石　松田美津子
松本清苑　萬谷碧凰　水野和香　南敏子
宮越素翠　三好和生　村田祥鳳　安井芳泉
山内昂波　山崎芳園　山田青渓　山吹縁
山村千秋　山室雅美　山本恵子　吉原愛璃
渡邉尚石

↘止のやむなきに至りました。それどころか本展の開催も危ぶまれております。

また昨年来準備してきました、台湾での日本篆刻家協会と中国上海及び台湾台北の中堅作家交流展への訪台団派遣も中止になりました。幸いにも展覧会は台北の国父記念館で開催されました。この原稿を書いている只今この時、開催中であり、パソコン、スマートフォンを通してその状況が刻々と伝えられてきております。この展覧会は一昨年三月に開催された日本と台湾の〝青年篆刻交流〟を受け、「今度は中堅作家による展覧会を」という声に押されて実現したものです。本協会からは喜多芳邑・黒田玉洲・田中修文・松本雅至・畔原裕美・後藤黄太郎・戸出九廬の七人が中堅参展作家として出品しました。また栄誉顧問として山下方亭・尾崎蒼石・井谷五雲、特別招待作家として多田龍淵・中島春緑・平田蘭石・真鍋井蛙の各先生方が出品しました。

加えてこれも準備に多くの時間を費やしてきました〝東西印人交流会〟も中止することになりました。この交流会は先年亡くなられました河野隆先生によって唱導されたもので、九年前の東北大震災による被災者、被災地域に少しでも文化芸術的光を当てたいということで開催した「頑張ろう！東北、篆刻作品展」に端を発するもので、わが日本篆刻家協会、東京に本部のある扶桑印社および日本篆刻連盟の三団体による交流活動です。作品発表・交流という我々の基本理念の実現を阻害されて殊に残念であります。

八月に予定されている研修の場であります「中央研究会」はどうなるものか。甚だ心配ではありますが、現在はどのような事態にも対応できるよう、鋭意努力するより方法はないと、執行部と幹部先生の意思疎通を行っております。

日本中をいや、世界中を不安に陥れているこの疫病であります。我々の活動は平和で安定した社会情勢で行える文化活動であることを念頭に考えれば、しばらくはその自粛もやむを得ないものでしょう。只今は会員諸氏の健康保持を祈るよりほかはありません。ロックダウンなどと騒がれ、外出自粛要請がなされる今日、用心に用心を重ねられて、日々お過ごしくださるように念じております。

それでもなお、七月の読売書法展、九月初旬に例年開催されます中国山東省潍坊での陳介祺研究会主催の篆刻芸術節あるいは日展など、不確定要素は存在するものの開催が予定されています。各印会及び会員諸氏の日頃の研鑽を期待するものです。この国難の厳しい情勢を千名の会員諸氏と十分に意思の疎通を図りながら、幹部の先生方と十分に意見交換をしながら、力を合わせて本協会の発展と会員諸氏の篆刻活動の進展のために尽力して参りたいと思います。

更なる皆さんのご協力をお願いいたしまして、ご挨拶といたします。

審査会場いっぱいに並べられた出品作

評議員作品から候補を絞り込んで梅舒適賞を選考

学生展高校生の作品審査に当たる正副理事長と常務理事

慎重に審査に当たる審査員

審査に先立ち基準等協議する審査員会議

第三十六回日本篆刻展「審査会」

第三十六回日本篆刻展の審査会が三月二十一日、公的機関が活動を自粛する中急遽、会場を兵庫県立美術館王子分館会議室からグリーンヒルホテル明石の大会議室に変更して行われた。

新型コロナウィルス感染拡大防止の一環で、審査員をはじめ審査係等スタッフを参集可能な近隣の役員に絞り、規模を縮小して変則的な形で行われた。全国から出品された参与、評議員、常任委員、委員、会員、公募の作品総数六四五点を対象に十一人の審査員が鑑別審査に当たった。慎重かつ厳正な審査の結果、参与から顧問賞、会長賞各一点、評議員から梅舒適賞三点、常任委員から大賞一点、準大賞五点、優秀賞一三点、委員から奨励賞三四点、会員から特選三四点、秀作賞五四点、公募から会員推薦賞五〇点、入選八点が選ばれた。併せて、委員奨励賞から寄託賞二点、会員特選から寄託賞四点、公募会推賞から新設された寄託賞原田の森ギャラリー館長賞一点が選ばれた。

作品は五月二十日から二十四日まで兵庫県立美術館王子分館（原田の森ギャラリー）で、特別展観「張耕源書画篆刻作品」、併催「第四回日本篆刻家協会学生展」とともに展観される。

●審査委員長
理事長　井谷五雲

●審査員
常任顧問　山下方亭
会　長　尾崎蒼石
副理事長　喜多芳邑　酒居石荘　小朴圃　真鍋井蛙
代表理事　黒田玉洲　渡邉和琴
常務理事　奥田晨生　古溝幽畦

●審査係
常務理事・印社代表
池田泥異　井後雅堂　戸出九廬　松本雅至

■日本篆刻家協会顧問賞・会長賞選考委員
常任顧問・会長・理事長　三人

■梅舒適賞選考委員
常任顧問・会長・理事長・副理事長　七人

■大賞選考委員（大賞・準大賞・優秀賞）
常任顧問・会長・理事長・副理事長・代表理事　九人

■学生展選考委員
理事長・常務理事（副理事長）　四人

主な受賞者一覧（P9掲載）
顧問賞～優秀賞
学生展　最優秀賞と優秀賞

８月課題　「乃得渾厚」

役員（黒田玉洲　選）

素翠

六朗

容庸

胡蝶

和仁

○宮越素翠　永野草翠
○松永六朗　正和杏葉
○木村容庸　村田祥鳳
○近藤胡蝶　青木雄山
○寺田和仁　川崎白水
宮野宗雄　水巻游光
北畑謙之　山崎井泉
遠藤栄子人　計五〇人

「乃」の処理がポイント。写真版五点は成功例。「厚」は説文通訓定聲に「厚叚借為旱」とあり旱を用いるも可。ただし、小篆は𠂤であり、下部を卩と誤用しているもの多し。印篆では卩も字典にあり可か？しかし「紛らわしきは、避けるべし。」が無難。

常任委員（梶川久美子　選）

華紅

極浦

恵草

唯文

芳翠

○福谷華紅　杉山美華
○奥島極浦　西野克衛
○鈴木恵草　番定静山
○堂守唯文　永田乾石
○向畑芳翠　稲垣竹扇
池谷宝樹　中本管城
津田秀鳳　大城容子
岡崎戯石　計四四人

八月の印文は四字で、比較的収まりのよい文字群であると思う。が、渾字の？のギコチない形が多く見うけられた。また、課題のサイズ違反があった。

委員（梶田稲州　選）

勝山

黎秀

耕石

秋鹿

游石

○大野勝山　水中澄山
○武田黎秀　藤田勉
○鈴木耕石　堤黄瑞
○井上秋鹿　木村行石
○山崎游石　山本智子
井畑喜雨　中村紀久
西岡貴美子　小林邦夫
八木正明　計四三人

今回の印文は比較的布字しやすいと思われる。ゆえに起筆終筆、線質があまくなりがち、また夏の高温のため、印泥の管理必要、使用前後の攪拌など月一回の点検が肝要。印泥の押し過ぎ、のりが悪くムラが出来た作品が一部見受けられた。

会員（北室南苑　選）

良孝

管玉

登志美

翠庵

幽篁

○相川良孝　山中徹人
○中本管玉　松本峰舟
○成瀬登志美　誤晶石
○尾畑翠庵　袴田恵理子
○遠藤幽篁　橋本陽一
佐野真咲美　植田杏芽
広森勝竹　浜戸三徳
上田玉雲　計四八人

界線と文字の線が平行に重なり合う箇所、あるいは垂直に接する箇所にどのような変化を加味するかによって、さらなる一味の魅力を加えることができると思います。

９月課題　「書肇於自然」

役員（酒居石荘　選）

和仁

燕安

草翠

繁治

青露

○寺田和仁　片畑仁美
○古野燕安　樫野麗琴
○永野草翠　田原呉山
○増田繁治　今村董圃
○畑間青露　萬谷碧凰
木村容庸　山崎井泉
名倉克彦　宮越素翠
山吹緑　計五〇人

五字句、四割弱が二行、殆ど2字3字の配置、32は少ない。三行でも大方は122か221、中には212稀には113の配字もあり楽しく拝見。文字は線で形作られる。形だけでなく基本は線。さすがこのクラスと言いたいところだが…。

常任委員（草田翠苑　選）

秀鳳

戯石

榴華

紅珠

玉峯

○津田秀鳳　澁谷春壽
○岡崎戯石　福谷華紅
○金井榴華　高橋忠義
○田中紅珠　鈴木恵草
○川栄玉峯　堂守唯文
奥島極浦　大城容子
杉山美華　池谷宝樹
橋本游月　計三八人

作品を作る時に重要な事がいくつかありますが、方向性を決め、特に印稿に時間をかけ、納得のいくものを作る事が大切です。そして最後に押印。印泥不足だったり、つけ過ぎ等、折角の作品が台無しになってしまいます。慎重に！

委員（熊本夕生　選）

悦治

紅霞

行石

遼華

黄瑞

○兼子悦治　水中澄山
○藤田紅霞　松村信夫
○木村行石　高木啓志
○鳴川遼華　山崎游石
○堤黄瑞　西岡貴美子
大野勝山　井上秋鹿
山本智子　山杉博子
井畑喜雨　計四一人

佳印が少なく残念でした。二字・三字の二行印が多く、次に一字・二字・二字の三行印。僅か二字・一字二字の印がありました。まずは、古典を礎にした印をお勧めいたします。また、印泥がかなり少ない作品がありました。

会員（黄平齋　選）

龍泉

晶石

蘇晨

幽篁

朴園

○池内龍泉　広森勝竹
○誤晶石　相川良孝
○川野蘇晨　鈴木素風
○遠藤幽篁　服部和彦
○城本朴園　成瀬登志美
植田杏芽　上田玉雲
袴田恵理子　松本峰舟
栗永美舟　計三八人

五字印書肇於自然の印稿設計、いわゆる篆法と書法面で皆ある程功奏をしました。変化もあります。但し、線質と刀法の面で見ると基礎の補強がまた必要。現當代印家の作の真似よりも、漢印の研究は第一である。

10月課題　「守拙」

役員（小朴圃選）

六朗

和仁

仁美

青露

緑

○松永六朗　安井芳泉
○寺田和仁　川崎白水
○片畑仁美　萬谷碧鳳
○畑間青露　樫野麗琴
○山吹緑　山崎井泉
浅野道男　村田祥鳳
田中九成　宮越素翠
近藤胡蝶　計五四人

ごく一部の作を除いて、章法の工夫をすることなく、只印文を刻しただけという作品が多い。
凡庸な我々では、そうした作に傑作ができよう筈もない。役員であることも鑑みて、見賢思齊の語を噛みしめたいものである。

常任委員（田中修文選）

墨石

博石

紅珠

極浦

宝樹

○長谷山墨石　藤聿彩
○小澤博石　白幡雪峰
○田中紅珠　脇田喜久
○奥島極浦　鈴木恵草
○池谷宝樹　高橋忠義
鈴木桂峰　向畑芳翠
大東尭夷　番定静山
岡崎戯石　計四二人

今回の課題は朱文で出品された方が多く、空間処理に苦心の跡を感じました。空間強調法、窄挿法など面白い作品がありましたが、結体に無理のないものを選びました。

委員（堤白遊選）

智子

黎秀

秋鹿

黄瑞

悦治

○山本智子　西岡貫美子
○武田黎秀　水中澄山
○井上秋鹿　田中滋
○堤黄瑞　小松五岳
○兼子悦治　井畑喜雨
大野勝山　藤田勉
伊谷昌子　松村信夫
大崎渓白　計四三人

「守拙」の二文字の印文で印の形で変化を求められた様です。各印の空間の取り方の違いで印象の違う面白い印が多く見られました。朱文の作品の方が多いでしたが少し線質が弱い作品が見られました。

会員（中村葉舟選）

哲幸

真咲美

和彦

素風

正樹

○吉田哲幸　川野蘇晨
○佐野真咲美　袴田恵理子
○服部和彦　尾畑翠庵
○鈴木素風　大喜多惠子
○林正樹　相川良孝
松島青榴　誤晶石
庄田真紀子　酒井眞樹子
中本管玉　計四四人

今回は朱文の作品が75％、結果朱文に秀作が多かった。朱文は辺縁の処理が大切と思います。一点課題違いがありました。（応募先の間違い？）折角刻した作品、審査外にならない様、呉々も注意して欲しいです。

11月課題　「澹然」

役員（渡邉和琴選）

芳泉

菫圃

燕安

耕碩

天空

○安井芳泉　萬谷碧鳳
○今村菫圃　永野草翠
○古野燕安　磯村育治
○堀口耕碩　高野弘深
○千蔵天空　宮越素翠
立石見聲　川久保明
山崎井泉　南敏子
増田繁治　計五二人

今回の二文字印は白文にいい作品が多かったように思う。文字は小篆、印象を使ったオーソドックスな作風が見られた。残念なのは、印箋に押す位置を配慮していただきたいと思います。

常任委員（長谷川帰海選）

竹扇

秀鳳

尭夷

游月

華紅

○稲垣竹扇　小澤博石
○津田秀鳳　奥島極浦
○大東尭夷　堂守唯文
○橋本游月　岡崎戯石
○福谷華紅　田中紅珠
平中葭舟　澁谷春壽
西野克衛　川栄玉峯
池谷宝樹　計三九人

澹字、淡、憺、音通で認められているので全て可として観ました。このクラスになると布字も工夫されていますが刻しかたで筆意がおかしくなったり誤字に見える作が有り惜しまれます。選ばれなかった作品も上位と差は余り無く出来は良かった。

委員（長谷川拓石選）

五岳

卿雲

黎秀

英昭

浩二

○小松五岳　田中滋
○大芦卿雲　大塚萩露
○武田黎秀　鳴川遼華
○小林英昭　高木啓志
○岡本浩二　木谷劉石
兼子悦治　山本智子
三宅渓月　松村信夫
大野勝山　計四五人

撃辺等で、誤字となっていないかを検字する事。誤字とした中に良印が数顆有り残念です。個展作品ではないので奇抜な印より、基本に添った印を心掛け、古人の印譜を見、数種類の辞典で調べて、稀な字は不使用が得です。誤字は画数不足、筆画を伸ばし過ぎた等です。

会員（古溝幽畦選）

寿和子

子路

幽篁

徹人

美舟

○寺地寿和子　師資田絹江
○高橋子路　吉田哲幸
○遠藤幽篁　大喜多惠子
○山中徹人　服部和彦
○栗永美舟　誤晶石
植田杏芽　川野蘇晨
國本学　明石精
庄田真紀子　計四三人

会員という資格の方ということですが、章法、刀法ともに安定した力作が多数ありました。押印の際の印泥ですがベタついたものや鮮明さに欠けるものも目につきました。公募展等の大印になっても同様なのでこの際印泥も吟味して下さい。

12月課題　「福如雲」

役員（山下方亭 選）

六朗

芳泉

江涯

道男

和仁

○松永六朗　千蔵天空
○安井芳泉　多田学友
○浅野江涯　村田祥鳳
○浅野道男　萬谷碧鳳
○寺田和仁　名倉克彦
南敏子　青木雄山
古瀬章石　今村董圃
川崎白水　計五〇人

篆書各体を正面からとらえてオーソドックスな作品を選びました。例えば古鉨、金文等を刃先で刻し、雰囲気をだしたような作品は避けました。

常任委員（松本雅至 選）

榮子

惠子

戯石

華紅

極浦

○中井榮子　中本管城
○永井惠子　杉江畦石
○岡崎戯石　田中紅珠
○福谷華紅　川栄玉峯
○奥島極浦　鈴木惠草
平中葭舟　津田秀鳳
白幡雪峰　大東尭夷
長谷山墨石　計三九人

易しい印文でもあり、誤字もありませんでした。ただ、バランス・章法が崩れているものがいくつかありました。三字が違和感なく調和するように、場合によっては、字書の文字に多少のアレンジが必要です。古印などを参考にしてください。

委員（御手洗眉山 選）

渓月

喜雨

悦治

信夫

秋鹿

○三宅渓月　小松五岳
○井畑喜雨　伊谷昌子
○兼子悦治　大塚秋露
○松村信夫　浦田紫雯
○井上秋鹿　大野勝山
大崎渓白　水中澄山
岡本浩二　池田叡花
堤黄瑞　計三九人

課題は一字目が偏と旁による文字です。今月はここに着目されたものが多く見られました。偏を下げ旁を上げて縦長にするーこれにより二行目とのバランスが整え易くなります。三字印構成のポイントの一つです。

会員（池田泥異 選）

寿和子

正樹

美舟

杏芽

真咲美

○寺埜寿和子　成瀬登志美
○林正樹　池田龍泉
○栗永美舟　遠藤幽篁
○植田杏芽　森下正義
○佐野真咲美　袴田惠理子
広森勝竹　誤晶石
上田玉雲　中本管玉
川野蘇晨　計四六人

印を刻されるのと同じ位字を書かれるのもいかがでしょうか。

1月課題　「陵霄」

役員（尾崎蒼石 選）

和仁

誠

育治

芳泉

白水

○寺田和仁　正和杏葉
○大原誠　名倉克彦
○磯村育治　大槻彦裔
○安井芳泉　浅野江涯
○川崎白水　片畑仁美
田原呉山　遠藤米子人
木村容庸　高野弘深
松本弘碩　計六一人

課題が二文字という事で制作はそう苦労していないと考える。逆に平凡な作しか出来ないとも言える。そんな事で正方の印より長方の作品が多く、秀作も多かった。全体として工夫が足りない気がする。印稿の段階で時間を多く取ってほしい。

常任委員（井後雅堂 選）

忠義

芳翠

榮子

雪峰

黎秀

○高橋忠義　平中葭舟
○向畑芳翠　市川桂水
○中井榮子　井畑喜雨
○白幡雪峰　水中澄山
○武田黎秀　中本管城
小松五岳　堂守唯文
大城容子　岡崎戯石
滝口照影　計四三人

二文字の脚部の動きに苦労されている作品が多く見られました。陵の「夕」と霄の「肖」の部分です。左斜め下へ平行に四本向くと左下への力が強くなり佳印になるには難しいかと思います。角度に多少の変化をつけることが必要でしょう。

委員（伊佐治祥雲 選）

萩露

美舟

叡花

秋鹿

杏芽

○大塚萩露　袴田惠理子
○栗永美舟　木村行石
○池田叡花　中本管玉
○井上秋鹿　松村信夫
○植田杏芽　田邊進
山崎游石　中野桃華
岡本浩二　小林邦夫
堤黄瑞　計四八人

全体的には秀作がみられました。しかし辺縁が気持ちが入らず、適当にやってある作が多くみられた。文字の一部と考え隅々まで気をぬかず彫ってほしい。又、陰影が二重になったもの、かすれたものなど多数あり、うまく出来上がったと思われる作も減点しました。

会員（石原豊玉 選）

草心

飛雲

真咲美

幽篁

武

○吉田草心　大喜多惠子
○永岩飛雲　明石精
○佐野真咲美　森下正義
○遠藤幽篁　池内龍泉
○小出武　井形淳
片岡一葦　庄田真紀子
吉田哲幸　服部和彦
川野蘇晨　計四二人

一月の課題「(陵霄)の志」大きな志、又高い地位に出世する志の意。新年の言葉に最適です。秀作には、仿古璽印の作品にすばらしい印があり、辺縁、日字格等うまく処理が出来ていると思います。又、戦国篆、古璽等の作品はその時代の印の研究も大切に！

連載

名印解説　小林斗盦刻印

真鍋井蛙

①の印面

①八十八翁

②老驥

私が本格的に篆刻を始めたのは大学二年生の頃である。その頃、梅舒適先生が講師として篆隷書法と篆刻法を指導して下さった。テキストは『書道講座・篆刻』（西川寧編・二玄社）で様々な古典の印例や当時ご活躍中だった先生方の作品や顔写真まで掲載されており何もわからないまま自分流に河井荼廬や漢印を摹刻した。先生は、これをやりなさいとか、この風格が良いとか悪いとかおっしゃられたことはほとんど無く学生の私にとっては少々困ったが、その中でも小林斗盦先生刻の①「八十八翁」が強烈に印象に残っている。この印の左辺はほとんど無い。大学の先輩に朱文は辺縁をつけるのを忘れないようにと指導いただいたのに、ほとんどそれがない。また二字目の「十」字は次の字の「八」に食い込んでいる。今の私であればこの印の三法について学生さん達にそれなりに説明もできるのであろうが、当時の私にとっては衝撃的な印だった。この印の使用者が分かったのは大学を卒業して、かなり経った頃であった。この印の使用者は書道界の泰斗、川村驥山（一八八二～一九六九）である。驥山は静岡県袋井市に生まれ、幼少のころから父東江の薫陶を受け五歳にして傑作「大丈夫」を揮毫、明治天皇銀婚式典に楷書孝経・草書出師表を暗記して神童と称される。楷書は鐘繇風、草書は狂草を最も得意とし、日本芸術院会員となった人物である。

私は令和元年七月長野の驥山館を訪れる機会を得、この印と出会った。印材は一般的切り石、側款は無い。思っていたよりかなり刻は浅いが線の際をズバリと刻してある。「十」字の縦画下方の欠けは故意であろう。二線の接点には少々墨だまりのようなものがあり横画が縦画に比して少々太い為、二つの「八」の間の空間が締まって見える。「翁」の上部にある公部の線には太細の変化を自然につけてあり、文字のスケールが大きく見える。手持ちのルーペで見るとかなりの推敲がなされたことが分かった。さてこの印だが、和中簡堂先生や川村龍洲先生にお聞きすると、驥山はこの印を手にしていないそうだ。米寿展を予定していた驥山はその展覧会を見る事なく他界したそうである。お通夜の日、小林先生が川村家に持参され驥山の長女佩玉女史に渡されたそうだ。後日佩玉女史が米寿展兼遺作展となった作品にこの印を押印されたそうだ。この名印の数奇な物語りをお聞きし、広く書道界の人々に知っていただきたく、今回の名印解説に取り上げさせていただいた。因みに②の「老驥」も小林先生の刻でこれもお通夜に届けられたもので「八十八翁」と共に印史に残る名印である。

第三十六回 日本篆刻展

（P.4掲載）

主な受賞者（敬称略）

日本篆刻家協会顧問賞（参与）
上田静雲

日本篆刻家協会会長賞（参与）
浅野祥雲

梅舒適賞（評議員）
福谷華紅　古瀬章石　今村董圃

日本篆刻展大賞（常任委員）
香月瑞光

日本篆刻展準大賞（常任委員）
中島重陽　荒川春翠　大城容史子
平中葭舟　眞嶋寧々

日本篆刻展優秀賞（常任委員）
長谷田曜子　金子静巴　稲田敏子
寺田香園　道家薫染　杉原照楓
永井恵子　山田香代子　斎藤芳清
井本雅士　金井榴華　浦岡香之
中本管城

第四回 日本篆刻家協会学生展

最優秀賞（学生展）
西邑環

優秀賞（学生展）
白神千咲　山﨑幹太　青木香里奈
中森百香　日置朋花　潮﨑頌子
山本宙　三宅愛奈　藤木美羽
大田潤

展覧会成績

改組新第六回日展出品者・入選者

会員出品
尾崎蒼石

無鑑査出品
真鍋井蛙

入選
井谷五雲　出田塘葭
喜多芳邑　黒田玉洲
小朴圃　関踏青
田中修文　中村葉舟
東尾高岳　古溝幽畦

青鐙忘詠（二〇）

小朴圃

「山水有霊」

封泥に仿った作品と言えば、呉昌碩の線に質感を感じさせはするものの、印全体の形はまだ十分ではなく、続く趙古泥・鄧散木になると、ひたすらデザイン性に走り泥の味が少なく、どこか違和感を抱いていたところへ古泥の登場である。

古泥、一九六四年生れの現代作家である。「山水有霊」を見て頂こう。正しく封泥そのものの感である。封泥を研究した氏ならではの境地であり、ついには名まで古泥にしてしまったのもうなづける。まず、封泥であるから泥に残ったものは完好なものばかりではなく、むしろ欠けたりして判読できないものも多く、その辺縁を含めて観賞吸収する必要があるが、氏の作はそのあたりをよく研究して自在である。

夫々の文字が欠けてはいるか、何という文字かは判る、ここが大切。字形すべてを表に現わす必要はないのである。

山の竪に対し、水の横。有は左に動いて山とは行間が広がっている。これに対して霊は水と接するが如くである。有と霊の右端を揃えたときの凡を思うと、この有から霊への動きは大きな意味がある。山と水との字間も広くとっていることの効果も大きい。個々の線を仔細に見ると、それぞれが平行に見えて微妙に揺れ動きながら違う方向性を持たせてあることの効果に気付かれると、篆刻に技術も相当に上ってきたと言ってよいだろう。

それにしても封泥の一番の特徴である辺縁の何と自然なことか、真に封泥拓を見る思いである。我々も観念的なものに堕ちることなく、研究を深め、自在な作をつくりたいものである。

デザインとして見る篆刻の展開
不華篆会習作展ＸＸⅦ
-「令」字をデザインして生活の中に書・篆刻-

不華篆会習作展ＸＸⅦを令和元年十一月二日～四日の三日間、伊丹市立工芸センター展示室Ｂにて開催した。

令和初の展覧会として「令和」の典拠『万葉集』巻五の梅花謌卅二首序文の内・初春令月・氣淑風和・梅披鏡前之粉・蘭薫珮後之香を篆刻作品課題とし、又、工芸作品は「令」をテーマとした。

篆刻作品は顆数が多く小ぶりな印影となり、例年とは異なる雰囲気の展示となった。工芸作品は各々創意工夫の跡が見られ、来場者に楽しんで頂けた。中でも配管インテリア（水道配管パーツで令の字をデザインした什器）が話題となった。

扨、次回は２０２０東京五輪の年、テーマは「輪」になりそう。

巡回展として、十二月三日から十五日まで、兵庫県立丹波の森公苑展示ギャラリーにて開催。

（木村容庸）

四媛展

二〇一九年十一月十日（日）～十二日（火）の三日間、兵庫県民会館内の兵庫県民アートギャラリーにて、書と篆刻の展覧会「四媛展」が開催されました。日本篆刻家協会、兵庫県書作家協会に所属して勉強している女性四人（出田塘葭、奥田晨生、坂本舜華、渡邉和琴）と、中国を代表する女流篆刻家のひとりである杭州の呉瑩女史の賛助出品を得、女性五人が作品を発表するという、篆刻ではあまりなかった展覧会になりました。呉瑩女史の書と四人それぞれの篆刻の合作の軸作品、四人の分刻作品（紹興の沈園にある陸游と唐琬の悲恋の詞碑の詞を分刻）、各人の篆刻と書作品、計二十六点を展示しました。

展覧会の前年、呉瑩女史の賛助出品の快諾を得、四人そろって中国へ出かけ友好を深めました。また、展覧会初日には、呉瑩女史が杭州から足をお運び下さり、三日間で五〇〇人近くの方にご来場いただくことができました。三日間という短い期間でしたが、これを糧に新たな一歩を踏み出そうと話し合い展覧会を終えることができました。

（出田塘葭）

篆刻と書 遠邇篆会展

十一月十二日（火）から十七日まで、磐田市立中央図書館で第二十八回展を開催しました。

壁面に会員の篆刻・書作品二十八点と駒形蒼岳前代表の書作品七点を、机上には日本の元号を会員十一名で分刻し、印影と印材四十四顆を展示しました。

前回に引き続き小・中学生の篆刻作品四十六点も展示、関心を持って見ていただきました。

篆刻はどんなものか、そして楽しさを伝えるべく、協会からいただいた会報・諸資料の外、遠邇篆会の紹介と来年の干支作品集を来場された方に、今後会員増につながればと配布しました。

六日間、三一〇人のご来場をいただき感謝しております。

（名倉克彦）

第十三回 娯憚文會展

十二月十三日（金）～十五日（日）、兵庫県民アートギャラリー二階の大・中・小展示室にて、日本篆刻家協会・公益財団法人徳川美術館等のご後援を得て開催し、四五二人の方にご来場いただきました。

井谷先生の「書経六則印興」をはじめ、会員六十三名による日頃あたためているさまざまな題材をもとにした書・篆刻が並びました。また特設四人展も同時開催しました。分刻は特別展観にちなみ「扶桑名家詠月瀬詩印印」としました。

特別展観として、漢詩人として名を謳われ書画人として生きた永坂石埭の書画篆刻作品と関係資料が陳列されました。

みなさまから賜ったご批評をもとに、次回へ向けて更に研鑽を積んで参りたいと思います。ありがとうございました。

（井本雅士）

第二十六回　一隅会展

一月三十一日から二月二日、アートホール神戸にて一隅会展を開催いたしました。と、この手の文章を出品者が書くとなるとなかなかに面倒でして。

「書は人なり」といった言葉を以前から耳にはしており、「そんなことはなかろう」なんて思っていましたが、「そういうこともあるな」と感じ始め。「好きこそものの上手なれ」と聞いて、「それだけでは上手にならんやろ」と思っていたものの、やっぱり「好きなのは基本やな」と感じ入り。

一隅メンバー全員が還暦を越え、若干手遅れ気味ではありますが、作家の代表作品はおおよそ六十歳前後の制作とききますので、今一度悪あがきの恋をしてみましょうか。本気で恋をすると重たいので、気付けなかったところを気付けるくらいに。偶然出会い、なんとなく言い寄られ、軽く応え、付き合い始め、どっぷりはまった「書」に。

（池田泥異）

第六回　伍葉展

一月三十一日～二月二日
於：神戸・元町みなせ画廊

メンバーが四人になり、新たなスタート。一人ひとりが自分を見つめ直し、原点に戻っての作品作りとなった。

今回は一隅の先輩方から同じ時期に同じ地域で展覧会をしようとご提案いただき、例年と比べ少し遅い時期での開催となった。

今般の事情で毎年よりも元町商店街に人通りは少なく、来場者は少なかったが、遠方より足を運んで下さった方も多く、大変有難かった。また会期中に『残念ながら展覧会には行けないが作品を拝見したいので作品集を送ってもらえるか』と非常に嬉しい問い合わせもあり、作品集を制作することの意義をあらためて実感し、この展覧会が色々な人達に支えられているというのを改めて感じた。

会期中には次回展に向けて話し合い、一年かけて取り組む課題も決定した。来年はさらに内容のある充実した作品が発表できるよう学んでいきたい。

（井後雅堂）

急告

新型コロナウイルス感染拡大防止にかかる行事の変更

新型コロナウイルス感染者が増加する中、感染拡大防止に向け、全国のスポーツや文化行事などで、中止や延期、規模縮小が相次いでいる。

日本篆刻家協会においても、令和二年度事業計画の中、一月の総会は予定どおり開催されたが、三月以降の事業が大きく変更された。

（四月八日現在の状況）

三月十八日から開幕の「第一回国際漢字篆刻芸術交流展」篆刻書法展覧に合わせた訪台団の派遣が中止された。なお、展覧会は三頁に既報のとおり台北において盛大に開催された。

三月二十一日に予定されていた第三十六回日本篆刻展審査会は四頁に既報のとおり規模を縮小し開催された。

三月二十九日に予定されていた「東西印人交流会」は来年同時期に延期された。

五月の第三十六回日本篆刻展授賞式・懇親会は中止が決定された。

「第三十六回日本篆刻展」は開催予定で準備がすすめられたが、その後の全国的な感染拡大状況を受けて、苦渋の選択から次の付帯事項を付けて中止することとなった。

付帯事項

①三月二十一日に実施した審査については成立したものとして扱う。（既に成績通知発送済）賞状・賞品・出品作品については指定表具店を通じて返却する。

②明年開催予定の第三十七回展において、本年開催予定第三十六回展の理事以上の作品及び顧問賞・会長賞・梅舒適賞・大賞・準大賞・各寄託賞を第三十七回展の作品と併せて陳列する。

③第三十六回展の作品集は作成し、例年通り会員に無料配布する。

④前記①～③を以て第三十六回展は成立したものとする。

その他

古河市の篆刻美術館において、六月二十七日から開催が予定されている本協会の役員展には予定通り理事以上の作品と地元会員の作品を展観する。

国際漢字篆刻芸術交流展作品集

展覧会案内

▼雙青會（関踏青・畑間青露）
雙青會展
〔延期・期日未定〕
会期　四月二十四日～二十六日
会場　大阪市・ギャラリー翰林堂

▼**第三十六回 日本篆刻展**
〔中止〕
会期　五月二十日～二十四日
会場　兵庫県立美術館王子分館（原田の森ギャラリー）

▼**第三十五回 記念随風會書法篆刻展**
会期　八月四日～九日
会場　京都市京セラ美術館

報告

▼篆靄社（古溝幽畦）
第十二回 篆靄社游藝展
会期　十一月八日～十日
場所　原田の森ギャラリー

▼蒼文篆会（尾崎蒼石）
第十八回 蒼文篆会展
会期　十二月二十日～二十二日
場所　大阪産業創造館

協会行事

常務理事会
十一月九日
大阪　錦城閣

二〇二〇年度
日本篆刻家協会理事会、総会ならびに新年会
二〇二〇年一月十二日
オークラアクトシティーホテル浜松

第三十六回 日本篆刻展 審査会
〔規模縮小・会場変更〕
三月二十一日
兵庫県立美術館王子分館（原田の森ギャラリー）

海外交流
「第一回 国際漢字篆刻芸術交流展」篆刻書法展覧訪台団派遣
〔中止〕
三月十八日～二十五日

東西印人交流会
〔来年同時期に延期〕
三月二十九日
舞子ビラ神戸

予定

第三十六回 日本篆刻展
〔中止〕
第四回 日本篆刻家協会学生展
五月二十日～二十四日
兵庫県立美術館 王子分館（原田の森ギャラリー）
特別展観　張耕源書画篆刻作品

第三十六回 日本篆刻展授賞式・祝賀会〔中止〕
五月二十三日
ＡＮＡクラウンプラザホテル神戸

第十二回 日本篆刻家協会役員展
六月二十七日～八月二十八日
古河篆刻美術館

第十三回 中央研究会
八月一日～三日
舞子ビラ

常務理事会
十一月十四日
錦城閣

〈予告〉第十三回 中央研究会

日時　八月一日（土）～八月三日（月）
場所　シーサイドホテル「舞子ビラ神戸」

主な内容

①「肖像印の制作」
西泠印社理事の張耕源先生を招き、講義とともに「肖像印」解説とその技法を披露していただき、研究会参加者全員が一寸角自分の肖像印宇を作成する。

②一字印の分刻

③「永坂石埭」
井谷五雲理事長による講義である。
書家・医師・漢詩人であり、森春濤門四天王の一人で書画・篆刻に秀で、石埭流の名で知られる永坂石埭の研究の一部を講義していただく。

編集後記

☆日本篆刻家協会実務機構が刷新されたことに伴い、この第二十四号より広報部も人員の入れ替えがありました。とは言えどこがどう変わるということもありませんので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

☆コロナウイルスの影響により日本はおろか世界中が大変なことになっております。本協会においても、多くの企画が延期・中止もしくは縮小せざるを得なくなりました。健康第一ですので、やむを得ない判断だと思われます。どうか皆様も三密を避けご自愛ください。

☆不要不急の外出は控えましょう。とのことですから、これを機に一層のこと篆刻三昧はいかがでしょうか。

（池田泥異）

コロナウイルスの影響により発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。また、編集作業後の変更などにより、記事内容の整合性を欠く点についてもご容赦ください。

編集：広報部
池田泥異　戸出九廬　木村容庸
畑間青露　石川無外　牧野象山
酒居石荘

お気づきのこと、ご意見など事務所までお寄せください。
FAX 072-760-3853
MAIL info@n-tenkoku.jp